～津田梅子の生き方（12）～帰国・再度アメリカへ派遣～

帰国後、梅子は住居を麹町区二番町に移しました。
梅子は自宅に寄宿させるなど女学生への積極的援助を行い、華族女学校で勤務するかたわら 1894 年（明治 27 年）には明治女学院講師も務めました。
その頃、アナ・ハーツホンは、父ヘンリー・ハーツホンと一緒に来日しました。
来日の間にアナ・ハーツホンは梅子の父が開設に大きく貢献した普連土女学校で高等科生徒のために英文学を教えました。アナ・ハーツホンと梅子との間にはブリンマー時代の友情が復活したのです。1898(明治 31)年 5 月には、梅子は女子高等師範学校の（後の東京女子高等師範学校、現：お茶の水女子大学）教授を兼任することになりました。
その年、万国婦人クラブ連合大会のアリス・ブリード副会長が来日しました。来日の理由の一つに、この大会に日本からも女性の代表を派遣要請することでした。この要請に明治政府から選ばれたのが、ともに華族女学校に勤務する梅子と渡辺筆子の 2 人でした。そして、梅子はアメリカコロラド州の首都デンヴァーで開催される第 4 回万国婦人クラブ連合大会で、日本の女性を代表してスピーチをするよう依頼されたのです。2 人は、急遽、6 月 5 日、アメリカのタコマ行きの船で横浜を立ち、コロラド州デンバーに到着の翌日、梅子はおよそ 3000 人の前で挨拶を述べました。この挨拶の中で梅子は、「やがて日本女性に発展期が訪れ、東洋諸国の女性の良い助け手になる日が来るであろうと語り、女子教育が拡まり、女性の地位が高まるにつれて、全世界を通じて女性が奴隷的な屈従や人形のような盲従の状態から解き放たれ、真に対等の資格で男性のよき協力者となる時代がくるであろうと」流暢な英語で話しました。
デンバー会議の後、マサチューセッツ州のレンサムという避暑地でヘレンケラーにも出会うことができたのです。その後、梅子と筆子はイギリスの女性たちから招待を受けました。当時内閣総理大臣であった大隈重信の後押しもあり、予定を変更してイギリス視察研修が実現することになりました。しかし、渡辺筆子は病気を理由に断り、梅子 1 人でイギリスに旅立ちました。
梅子は、ロンドンに到着して、ケンブリッジ大学などを訪問しました。ケンブリッジ大学を後にしてからヨーク大主教からの祝福を受けたり、女子のための初等、中等教育機関として由緒あるチェルトナム・レディーズ・カレッジに 10 日間滞在して視察しました。その後、ブリンマー時代の友人を訪ねてフランスのパリに行き、約 2 週間滞在し、再びイギリスに戻りオックスフォード大学へ向かい聴講生として文学や倫理学、歴史学を学びました。梅子は、講義に参加するだけなく、オックスフォードにあるすべての女子カレッジの校長と面接する機会を持ち、女子高等教育について意見交換を行ったりもしました。
ロンドンに戻ってからは、近代看護教育の母、看護師の祖とも呼ばれているナイチンゲールにも会うことが出来ました。79 歳を迎えようとしていた病身のナイチンゲールも梅子の訪問を大変喜んでくれて、帰りにいただいた花束は、押し花となって 120 年以上の時を超えて、今も津田塾大学津田梅子資料室に残されています。

ナイチンゲールからいただいた花の押し花
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

梅子は，イギリスを発ち、アメリカ経由で帰国の途に着きました。

参考文献:高橋裕子『津田梅子―女子教育を拓く』　岩波ジュニア新書　2022 年 150 頁～172 頁